

はじめに

国際哲学センター（「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ）

センター長 河本英夫

エコは広範な課題に広がった複合領域である。理系も文系も、実験科学も経済学も、なんらかのかたちではエコ・フィロソフィとかかわりがある。およそ学問の専門化に逆行するようにエコの課題は成立している。だがそれはエコだけにかかわるのではなく、哲学という学問の固有性にもかかわっている。哲学こそ特定の現場をもたないのである。経営哲学も社会哲学も法哲学も存在する。だが哲学には、固有の領域はない。

エコ・フィロソフィは、課題を見出しながら、その場その場でより良い解を求めようとする試みの総称である。いつものように新たな課題は生活習慣病のように出現してくる。ここ数年ではマイクロ・プラスチックゴミが話題になった。海水のなかで一定の濃度までは人間の眼に見える形にはならない。海岸沿いに夥しい非溶解性のゴミが散乱する。そうなったとき人間に眼には、はっきりとただ事ではないかたちで見えてくる。人間の眼に見えるほどになったときには、すでに問題は簡単には解除できない場面まで来ている。

環境というとき、自然環境だけではなく、文化環境や歴史的環境までも含まれるような総合的な環境概念が成立する。そうした環境まで視界に入れた環境論を考えると、かつて飲み物のストローとして麦藁のクキを切って使っていたことを思い出す。生活の選択肢は、かつては相当に広がった。ゴミの量を減らすことは、かなりの部分習慣に依存する。おそらくエコ・フィロソフィとは、新たな習慣の形成を含んだ試みなのである。